

## 過 ち

不適切な発言をした有名人が、その後の謝罪の仕方や所作のあり方で批判されることがよくある。最近も、オリンピックの種目についての発言がもとで、抗議され、謝罪の仕方がよくないなどと、SNS上で話題になっている方もいる。私の教員生活も、失敗や過ちの連続であったが、私はきちんと謝ることができていたのだろうか、と考えてしまう。

「過って改めざる 是を過ちと謂う」

論語の一節のようだ。過った後改める、その出発はきちんとした謝罪だろう。しかし、教員は子どもの前で頭を下げることにいつしか抵抗感を持つようになりがちだ。それは、子どもを指導し、場合によっては管理したり、指示したるすることが必要な職業だからだろうか。私もそうであったかもしれない。だから、きちんと謝ることができたかと自問するのである。

「至誠にして動かざる者は 未だ之れあらざるなり」

これは孟子の一節である。誠を尽くせば、人は必ず心動かされるということ、らしい。自分が過ったと思ったら、先生の権威を捨てて、心から子どもに謝る、そんなことができる教員でありたい。

さだまさしの曲である「償い」に関わるエピソードは有名である。裁判官が被告人に対し「唐突だが、君たちはさだまさしの『償い』という唄を聴いたことがあるだろうか」と切り出し、反省することについての説諭を行ったというもの。裁判官が裁判において流行歌を元に話をするのは異例のことらしいが、それほどこの歌詞が裁判官の心に訴えるものがあつたのだろう。

いつの時代でも、誠を尽くせば、人は心動かされるのだろう。